

## 研究ノート

# 中国人日本留学の歴史問題について

王 玉珊\*

## 目 次

まえがき

### I. 日本留学という教育方法の出現原因

1. 国内の原因
2. 国外の原因

### II. 日本留学の五段階

1. 1896年～1911年
2. 1912年～1930年
3. 1931年～1945年
4. 1946年～1976年
5. 1977年～現在

あとがき

## まえがき

110年前の1896年に清政府によって日本留学へ派遣された13名の中国青年は中国第一代の公的派遣留学生となって、同時に中国人が日本へ留学する幕を上げました。その時から現在まで中国人の日本留学風潮は上昇したり降下したりして百年も続いてきました。これは中国留学歴史の重要な構成部分となっている上に、中国近代史及び中日関係の発展変化にも大きく影響していました。本文は歴史的な観点からこの110年の中国人日本留学の歷程を振り返ってみます。

## I. 日本留学という教育方法の出現原因

1896年、中国第一代の留学生は海を渡って日本に留学していきました。当時、留学教育が現れた原因と言えば多方面の要素がありますが、とにかく国内原因と海外原因の両方から纏めようと思っています<sup>1)</sup>。

### 1. 国内の原因

#### (1) 留学救国の社会思潮

日清戦争の中で中国が戦敗して「中日下関条約」を締結したことによって中華民族は嘗てない危機に陥ってしまいました。出国留学は当時民族を滅亡から挽回する有効なルートの一つだと考えられていました。国の選択に至って国民から以下の原因に基づいて日本を第一の候補国と認められました。第一、中日両国は地理的な距離が近く、国家に一旦何かあれば迅速な対応が出来ます。この為、一衣帯水の日本は理想的な留学国となりました。第二、日本留学の学費は割合に安かったのです。当時の為替で中国国内での学費はほとんど留学の費用に相当していました。第三、中日両国は文化の面でも血縁関係を持ち、文字や習俗などが大体似ていて、留学生は日本生活に適応しやすいのです。中日両国とも漢字を使い、「同文の国」とも言われて

---

\*中国：東北財経大学 講師

います。第四、「東洋に経験を学んぶことは便宜で、効果が速い」。当時、中国人の日本留学に対して日本人は「日本の新式教育或いは新式法律は全て西洋から学んだのに中国人はどうして西洋へ留学して行かないか」と疑問したかもしれません。然し、当時の中国としては「中国は近代化の方面で大分遅れていて、追いつかなければなりません。そして、西洋国家より既に糟粕を取り除いて精華を残した日本に習った方が確かに便利でかつ有利である」と全く異なった考え方を持っていました。第五、清政府は日本の君主立憲制に傾いていたのです。新政を実行した前に清政府は5名の内閣大臣を海外へ視察に派遣したことがありました。結局、西方の民主共和体制に賛成できないが、皇族統治の継続可能な日本君主立憲制に対してまだ受け入れられると認識しました。最後に当時の中国にとっては一番必要とされたのは人材でした。一方、当時アメリカに派遣した留学生は勉強期間が長く、投資が多く、単なる人材の蓄積にすぎませんでした。要するに中国人の視線が日本を向けるようになりました。

(2) 清政府が新政を遂行する必要でもある

帝国主義の圧迫と脅威を受けながら、全国民衆の反抗闘争と資産階級の政治と権利を求める請願活動に面して、清政府は従来のやり方で統治を続けられないと痛感していました。すると、折をみて「変法」を提起し「新政」を実行し始めました。ところが、「新政」を押し広めるにあたって最大の難題は人材不足ということで、人材育成の基地は日本にあるから、適当な施策を取らなければならないと判断しました。

政府が留学人材を重用していました。1903年、清政府は全国向けに「留学卒業生の激励規定」を公布しました。規定の中で「日本に留学し、帰国した学生は日本普通中学を卒業

しかつ優等証書を取得した人は「拔貢」出身を与え別途採用します。高等学校を卒業しかつ優等証書を取得した人は「挙人」出身を与え別途採用します。国家大学を卒業しかつ学士証書を取得した人は「翰林」出身を与え別途採用します。博士証書を取得した人は「翰林」に加え「翰林昇階」出身を与え、官員に招聘する」と定められました<sup>2)</sup>。

政府は自費出国を提唱していました。清政府は財力に限られているので、公費留学を激励する同時に自費留学を強く提唱していました。「自費出国」の留学生に対して公費生と同じ官職で誘惑していました。

科挙試験を廃止してしまいました。1903年、袁世凱と張之洞は「科目ごとに科挙試験に合格する人数を徐々に低減する」と上奏しました<sup>3)</sup>。1904年、清政府は最後の科挙試験を実行しました。1905年、清政府は科挙試験を廃止すると命令を下りました。中国で千年も続いた科挙試験制度の終結は社会で大きな反響をもたらしました。特にインテリへの影響が大きかったのです。彼たちはこの現実に迫って新しい道を探し、新しい発展を図る途端、出国留学ははっきりとして最高選択となりました<sup>4)</sup>。

## 2. 海外の原因

日清戦争以降になると、日本社会は中国問題を研究している各種の団体と学会ができて、中国研究のブームとなりました。中、上層における大多数の人は中日友好を願い、文化交流を強化し中国留学生の受け入れを呼びかけて「昔の指導の恩返し」をしていました。日本政府は国内で一連の措置を取りました。官員と紳士を中国へ絶えずに派遣して、中国政府と地方政府を説得し日本への留学生を派遣させました。日本人を中国学校の教師に派遣していくことを通じて中国の学生に影響を

及ぼすことを目指していました。データによると、清時代の末頃世界各国から集まってきた外国教師の中に日本人が600名にも達しました。同時に日本国内で、中国留学生のため生活と勉強の条件を改善し、創造してくれました。中国学生の日本留学ブームに伴って中国留学生のため開設された学校、即ち大学予科と中等教育を両立する学校も日増しに増えてきました。こんな学校はみんな中国学生のニーズに合わせて学制と教学内容を設置していました。

## II. 日本留学の五段階

中国人が日本留学の歴史を述べ、それぞれの段階の背景と特色を分析するにはその110年の歴史を以下のように五段階と分けています。第一段階は1896年～1911年、日本留学風潮の出現と第一次ブームでありました。第二段階は1912年～1930年、日本留学の発展と変動の時期でありました。第三段階は1931年～1945年、中日戦争と日本留学の曲折時期でありました。第四段階は1946年～1976年、日本留学の低調と低迷時期でありました。第五段階は1977年～現在、中国人の日本留学が回復し、かつ新しい高潮を迎える時期であります<sup>5)</sup>。

### 1. 1896年～1911年

これは日本留学風潮の出現と第一次ブームとなった同時に、留学歴史の中で一番重要な時期でもありました。周知のように千年以上の中日文化交流の中で主流は日本が中国に学んで、例えば日本の学生や僧侶は日本政府の派遣された遣隋使や遣唐使のあとについて中国にやってきました。彼たちは中国の先進的な文化を日本に持って行って日本社会の発展進歩を推進する同時に、中日両国の文化交

流をも促進しました。然し、近代になると中日間の留学傾向は逆転してしまいました。19世紀末～20世紀の初め、大勢の中国青年は日本に殺到して勉強する風潮が現れました。その転換は1894年～1895年の日清戦争でした。梁啓超の言い方では中国人が400年も見続けた夢はこの事件で目を覚まさせました。中国の知識人たちはこの時からこそ中国はなぜ失敗したか、日本はどのようにして富強であるかを考え始めていました。康有為は「強敵を師資としてかまわない」と提出して日本を倣い変法維新を行って救国することを主張しました。

1896年に清政府が派遣した第一回の公費留学生に続いて各省の地方政府も相次いで日本へ留学生を派遣して1899年までに留学生の人数は既に200人余りに達していました。20世紀の初めになると、更に数多くの自費留学生も出ました。1903年まで日本への留学生が約1000人いて、1905年～1906年は最も高潮になって七、八千人にも達しました。その後だんだん減少しつつありますが、1911年にはまだ三、四千人を保有して中国留学史の嘗てない第一次ブームとなりました<sup>6)</sup>。

この時期、中国の留学生は日本で幅広い専攻を勉強して、特に政治法律と軍事が一番人気でした。たくさんの留学生は各種愛国運動の参加をきっかけとして革命の道を歩み始めて、そして日本で新聞と雑誌を創設したり書籍を翻訳し、出版したりして新文化と新思想を積極的に宣伝していました。同盟会及び革命を宣伝して武装蜂起を起こした中堅はほとんど日本留学の学生でした。例えば皆さんによく知られていた同盟会の指導者黄興、革命宣伝家の鄒容と陳天華、革命烈士の秋瑾と徐錫麟などは全員早期の留学生でした。

この時期の日本留学教育は中国に重要な影

響を与えました。当時、清政府が日本留学の政策を実施した目的はこの方法で西方科技を身につける留学生を育成して、自身の封建統治を維持するのに奉仕させることでした。ところが、留学生たちは中国社会に思いにもよらない影響をもたらしてきました。

留学生は日本から帰国して大体教育仕事に就いて、当時日本で流行っている教育理論と方法を自分の教育実務に活用していました。そして、日本の教育体制をも中国に持ってきて日本学制を原本として中国初の近代学制即ち、「癸卯学制」を修訂し、公布しました。他に従来雇用した日本人教師も留学生帰国をきっかけに日本へ帰らせて、清政府の財政負担も低減することが出来ました。

留学生たちは書籍の翻訳などを通して資産階級の新思想を宣伝していました。他に新聞や雑誌を創設し、訳書滙編社（1900年）、湖南編集社（1902年）と国学社（1903年）などの翻訳団体を創立して欧米及び日本の新理論と新学説を国民に紹介し、宣伝しました。同時に資産階級の民主学説を使って多方面から中国封建専制の罪を攻撃して、清政府を反抗し革命する理論、方針と道を一生懸命に探索しました。一方、中国人民の思想解放を促進して、辛亥革命の発動に思想基礎を築くことができました。留学生は自ら帝国主義と封建主義を反抗する革命実践に参加して、その内大勢の人が辛亥革命の指導中堅にもなりました。孫文が日本で結成された同盟会は日本での留学生を基本部隊として発足されました。1905年～1907年の間、データに考証できる同盟会の会員は379人で、その内留学生は354人、90%を占めていました。

中国女性はこれで始めて教育を受ける法的な権利を取得しました。新型学制を規制している「奏定学堂章程」に女子教育の内容が含まれなかったのです。1902年、呉汝

纶が日本へ教育を視察に行ってから編纂した《東遊叢録》は新教育の指針となり、中国女子教育の出現に相当なる刺激を与えました。女子留学生の出現及び彼女たちが設立した雑誌の影響は1907年3月8日に「女子師範学堂章程」と「女子小学章程」を公布することを促しました。女子教育はこの学制によって確定できました<sup>7)</sup>。

もちろん、この時の日本留学教育はある程度問題が存在していました。当時の留学生は普通教育と速成教育を受けるのが多数者でありました。清学部の上奏文の中でもこの状況を指摘しました。「日本での留学生が万人を超えたけど、速成教育を受けたのは60%、普通教育を受けたのは30%、途中で退学した人は5%～6%、高等学校に入学したのは3%～4%、大学に進学したのは只1%しかいなかった。」これに対して、同時期の欧米に行く留学生が速成教育を受けたのは極少なく、普通教育を受けたのはいるけど、日本ほど30%という高い比率には達していません。殆ど「勤勉かつ着実」な学風を身につけました。1906年、朝廷の学部が実行された留学生卒業試験を通して最もこの問題が分かるようになりました。試験結果として受験生の大多数を占めた日本留学生は全員「最優者」と無縁で、逆に「人材にならない」と思われるアメリカ留学の学生はベストフェブを包括しました。全く当時早稲田大学の主事青柳篤恒教授の速成教育に対する「速は速だが、成りにはなれない」という予見に適中してしまいました。日本留学学生の教育レベルが比較的低下するという実情に鑑みて清政府は1906年に「日本留学学生管理定款」を公布して、留学生の資格などを限定されていました。



## 2. 1912年～1930年

これは日本留学の発展と変動の時期でありました。1911年の武昌蜂起の前後、多くの日本留学学生は帰国して辛亥革命に身を投じたので、日本留学の学生人数はいっぺん激減しました。1913年～1914年の間再び四、五千人に増加して、第二次日本留学ブームとなって、1930年までにもまだ二、三千人残っていました。この時、国家の未来を建設するため日本に来た人もいるし、混乱社会に不満を持ち救国の道を見つけるため日本に来た人もいました。政府派遣の公費留学生もいれば、多くの自費留学生もいました。

この時期、中日関係は錯綜複雑かつ波瀾万丈で、日本留学学生たちは殆ど各種の政治活動に投身したことがあります。例えば、1915年に袁世凱の帝政移行を反抗する闘争の中で李大釗は中国日本留学学生総会を代表して「警告全国父老書」を起草しました<sup>8)</sup>。日本から帰国した留学生の蔡鍔は護国軍を結成して武力で袁世凱を討伐していました。1915年以降、日本から帰国した留学生たちは新文化運動を発動して、「新青年」編集部の核心人物であった陳独秀、李大釗、魯迅たちはみんな日本に留学した経験があって、日本民主主義の影響を受けました。1918年、日本にいる中国留学生が「中日共同防敵協定」の反対闘争を發起した一方、たくさんの留学生は帰国して帝国主義と北洋軍閥を反抗する「五・四運動」に身を投じました。一部の留学生は1919年5月4日に起こった天安門デモ及びその後のたくさんの闘争に参加しました。これに応じて5月7日、日本にいる中国留学生も氣勢雄大なデモを起こしました。また、陳独秀、李大釗、李達、李漢俊、周佛海、周恩来、董必武などを始めとする留学生は日本でマルクス主義の影響を受け、帰国してから共産党の建党及び早期活動にも参与しまし

た。この時期、国民党及び各地の軍閥と官僚も日本の軍事、政治法律を勉強させるため、多くの留学生を派遣しました。国民党と民国政府に勤めていた党政要人、軍事指導者例えば蔣介石、汪精衛、胡漢民、戴季陶、閻錫山、何応欽、白崇禧らも嘗て日本に留学したことがあります。二、三十年代において日本留学学生の左翼文化活動も盛んになっていて郭沫若、郁達夫、田漢とも文化団体を結成したり刊行物を創設したりしたことがあります。

## 3. 1931年～1945年

これは中日戦争と留学風潮の曲折な時期でありました。1931年に起こった「九・一八事変」によって中日両国の関係が急激に悪化して、長期的な敵対戦争状態に陥っていることは学生の日本留学にも重大な影響をもたらしました。1931年9月18日以降、日本にいる留学生は休校宣言を始め、10月末まで既に2000人もの学生は帰国してそのうち少ない学生は救国運動の流れに投入しました。その後、1933年～1934年の間に再び日本留学の人数が段々増えてきて1000人ぐらいに回復しました。原因を分析すると、この時期進歩活動に投身した青年インテリは当局の迫害を避けるため次から次へと日本留学に駆ける一方、政府も自費留学を提唱していたからであります。そして、当時の留学費用は低く、手続きは簡単で「旅券無し」で日本へ行けました。だから、1935年～1937年の時、在日留学生は改めて五、六千人に増えて、第三次留学ブームとなりました。

但し、1937年に発生した「芦溝橋事変」の直後、日本にいる留学生は相次いで中国に戻って救国運動を展開しました。二ヶ月にも至らないが、帰国留学生は4000人あまりにも達しました。たくさんの学生は各種の救国活動に投身して、国土を保護するため戦場で

亡くなった人もいるし、八路軍や新四軍に参加した人もいました。1937年～1938年、国民政府は日本留学学生訓練教室を開設して数多くの政治幹部を育成しました。1938年～1945年、中日両国が国交断絶を発表したせいで、中華民国はこの時から日本へ公費留学生の派遣を中止しました。

1931年～1945年、日本留学学生には喬冠華、孫平化という有名な外交官及び夏衍、田漢、林林、杜宣、鐘敬文などの有名な作家や学者が現れました。

#### 4. 1946年～1976年

これは日本留学の低調と低迷時期でありました。戦後、中日国交はまだ回復されないで、両国の文化と留学交流はまだ低調な状況に止まっていた。1947年、国民政府は抗日戦争の時日本へに行った留学生たちを対象として「リコール政策」を施行しました。1952年、日本吉田茂政府は台湾当局と「日台条約」を締結したので、台湾学生は続々と日本へ留学してその中公費留学生や自費留学生或いは日本側の奨学金をもらった学生もいました。データによれば1950年～1976年の間に日本留学に行った台湾学生は約3000人もいました。他に、香港とマカオから日本へ行った留学生も出ました。

この時期、中国大陸の学生は日本への留学者がめったにいなかったものでありました。それにしても中国に戻った留学生たちは中日友好運動の最前線に活躍して中日国交正常化の回復に大きく貢献していました。例を挙げると、1963年に設立した中日友好協会において名誉会長の郭沫若、会長の廖承志、秘書長の趙安博、副秘書長の林林と孫平化、常務理事の張香山、肖向前、理事の田漢、夏衍とも日本への留学経験を持っていました。1966年～1976年に起こった「文化大革命」の中

で少なくともなかった日本留学学生は迫害や不公平な待遇を受けてしまいました。両国の有識者の努力を通じて1972年ようやく中日国交正常化を実現して、その後中国政府は日本語勉強の目的で毎年日本へ少量の留学生を派遣し始めるようになりました<sup>9)</sup>。

#### 5. 1977年～現在

これは中国人の日本留学の回復と新しい高潮を迎える時期であります。1977年、「文化大革命」が終了した後、鄧小平は留学生派遣の問題を提起され、当年東京大学へ留学生を派遣して理工と農業を勉強させました。1978年に中国は改革開放時代に入って、「中日和平友好条約」を締結して法律上で正式な中日国交正常化を実現しました。中日文化交流の発展につれて中国学生の日本留学は回復を戻しかつ新しいブームを迎えました。1979年、中日両国政府は留学生の派遣問題について協議して、お互いに留学生を派遣することが正式に決まりました。この年、日本への中国公費留学生は140人で、1982年になると960人に増えました。一方、自費留学生の増加は最も早く、僅か2年間で1981年の121人から1983年の1098人に激増して公費留学生を超えました。特に1987年～1989年まで新しい「留学ブーム」が現れました。

1987年、中国に日本留学の自費留学生は既に7000人に達して、特に1988年になると2万人にも急増していました。この新しい「日本留学ブーム」の出現原因として、先ずは中国の改革開放政策の実施及び中日友好関係の発展が考えられました。当時、中国政府は出国留学を提唱し激励して、若者たちも海外に行って視野を広げることを望んでいました。同時に、日本政府も外国留学生の受け入れ政策を積極的に実施していました。このほかに、欧米留学より日本に行くのは距離が

近く、費用が少ないなどの原因を列挙できません。当然、一部の人は盲目的に付き従っていたから、不法滞在や不法就労などの現象も出ました。

1990年代以降、日本留学の方式はもっと多様化かつ多ルートになって中国政府は「留学を支持し、帰国を激励し、行き来が自由」の政策を実施し始めて、もっとゆとりのある環境を作り出して、留学生の将来発展の便宜を図っています。多くの日本留学学生は祖国に戻って自分で起業して或いは企業に就職したりといった活動で中国の社会主義現代化建設に大きな貢献をしています。

## あとがき

最後にこの110年の日本留学歴史が私たちに与えられた啓発を以下のような二つの方面から纏めています。

第一、この110年の中で日本留学の学生は中国近現代史の発展に多大な貢献をしました。同盟会の創立から辛亥革命、袁世凱専制政治の反対運動、五四運動及び中国共産党の成立そして北伐戦争、抗日戦争及び新中国の建設の中でも、日本留学学生たちは重要な役割を果たしていました。留学生先輩たちの愛国主義、中華振興の精神と伝統は後輩の私たちが相続して発揚しなければなりません。社会主義現代化建設の現在、日本留学学生は依然として中堅部隊で、重要な働きを発揮しています<sup>10)</sup>。

第二、日本留学の学生は中日友好と交流の架け橋と紐帯であります。多くの中国青年は日本に渡って日本の各地と民間に立ち入って幅広い文化交流を展開する上に、日本人民と

深い友情を結びました。当時、魯迅先生は日本仙台医科専門学校の解剖学教授藤野巖九郎先生との友情はその典型的な事例であります。しかし、中日関係の悪化は中国人の日本留学に嚴重な影響を与えて、学生たちの日本留学も色んな政治風波の試練と曲折を経験しました。日本留学の先輩は中日の国交正常化を実現し、中日友好交流を促進するのに大きく貢献していました。私たちは現在の中日和平友好関係を大切にして、積極的に中日両国の文化交流と民間交流を促進し、中日関係を善隣友好、互惠協力の健康的な方向へ発展させるように努力しなければなりません。

## [注]

- 1) 李鳳斌 (1996) 『清末中国学生留日原因初探』 『陰山学刊』 p41 参照。
- 2) 周一川 (2007) 『近代中国女性留学日本の歴史』 社会科学文献出版社 p5 参照。
- 3) 楊曉 (2000) 『《勸学篇》と20世紀初期の日本留学ブーム』 華東師範大学学报 p74 参照。
- 4) 趙寿蓮 (1997) 『清末留日熱潮出現の原因と影響』 『學術論壇』 p38 参照。
- 5) 沈殿成 (2006) 『中国人留学日本110年』 侨園 p5 参照。
- 6) 李協京 (2004) 『中国近代史上の早期日本留学』 p32 参照。
- 7) 周一川 (2007) 『近代中国女性留学日本の歴史』 社会科学文献出版社 p37 ~ 39 参照。
- 8) 呉漢全 (2000) 『日本留学と李大釗早期思想の発展』 徐州師範大学学报 p12 参照。
- 9) 王曉秋 (2006) 『中国人留学日本110年歴史回顧と啓示』 『徐州師範大学学报』 p1 ~ 3 参照。
- 10) 梁燕波 (2005) 『近代中国留学教育と影響』 『山西師範大学学报』 p120 参照。

## On the History of Chinese Students Studying in Japan

WANG Yu Shan

Dongbei University of Finance and Economics

### **Abstract**

This paper briefly reviews the history of Chinese students studying in Japan in terms of their causes of going to Japan to study, the various stages that they experienced and the lesson we can learn from them. Chinese students went to Japan for both internal and external reasons. The historical process of Chinese students studying in Japan includes five stages. The first stage lasts from 1896 to 1911, which is the beginning and first climax of going to Japan to study. The second stage begins in 1912 and ends in 1930, which is a developmental and fluctuating period. The third stage is between 1931 and 1945, which is the Sino-Japanese War period and the up-and-down period for Chinese students studying in Japan. The fourth stage lasts from 1946 to 1976, which is the lowest point and depression of Chinese students studying in Japan. The fifth stage starts from 1977 till today, and the present stage is the resumption and new climax of Chinese students studying in Japan. The 100-year-long history of Chinese students studying in Japan teaches us two lessons: first, Chinese students studying in Japan made great contributions to the development of modern China, and in current socialist construction they will make even greater contributions. Second, Chinese students act as the bridge of friendship and communication, and they have made great efforts and contributions for the Sino-Japan cultural exchange.